

高等学校の音楽学習における解決策創造力の育成

栗木 陽子

(本講座大学院博士課程後期在学)

Development of Solution Creativity in High School Music Classes

Yoko AWAKI

Abstract

In November 2014, Hiroshima Prefectural Board of education announced *The Action Plan for Learning Innovation in Hiroshima*. The objective of this plan is to promote learning approaches that effectively utilize knowledge and cooperate among students to create new value. This plan has been devised in anticipation of the next revision of the course of study in Japan. Additionally, conducting lessons in accordance with this plan will promote understanding of the new course of study. Therefore, this practical study was performed with a focus on "problem-identifying and -solving learning," which is one of the six measures of the plan. In particular, this study focused on solution creativity, which is necessary for problem solving, and furthered insight as to how teachers should support their students. For about three months, high school students created original accompaniment for a piece of music for each group of 4 or 5 people, while considering the form of song and the content of lyrics, and practiced singing while playing the guitar for each group. As a result, it was confirmed that incorporating "problem-identifying and -solving learning" into a music lesson is effective in expanding the musical perspective of the students and overcoming their personal problems. Conversely, it was revealed that the students tended to ask for easier performance contents and there was difficulty in securing time for continuous thinking for students.

はじめに

平成 28 年 8 月、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が取りまとめられた。平成 26 年 11 月より、次期学習指導要領の改訂に向けて子どもたちの現状と課題を整理し、各部会が検討を重ねた結果、次期学習指導要領等の改善の方向性は、①学習指導要領などの枠組みの見直し、②カリキュラム・マネジメントの重要性、③「主体的・対話的で深い学び」の実現、の 3 点に集約された。

一方、平成 26 年 12 月、広島県教育委員会は、「広島版『学びの変革』アクション・プラン」(以下、「アクション・プラン」と表記)を策定した。これは、グローバル化や生産年齢人口の減少といった「変化の激しい社会」で活躍するために必要な資質・能力(コンピテンシー)を育成するための方向性を示したものである。具体的には、これまでの「知識ベースの学び」に加えて、知識を活用し、協働して新たな価値を生み出す主体的な学びをねらいとしており、それに向けて 6 つの施策が展開されている。さらに、6 つの施策それぞれについて、10 年後の目指す姿と、今後 5 年間のアクション・プランが策定された。広島県の「アクション・プラン」が次期学習指導要領等の改訂を見越して策定され、また実践されていることは明白であろう。また、この「アクション・プラン」に則って授業研究を行うことは、次期学習指導要領の理解の深化にもつながると考えられる。

筆者は、「アクション・プラン」において展開された6つの施策の中から「課題発見・解決学習の推進」に着目した。課題発見・解決学習に関しては、平成27年度から県内の小中高あわせて約60校のパイロット校を指定して研究開発がスタートしており、平成30年度までには、県内のすべての公立小中高等学校で実施する計画である。このような方向性の中、音楽担当教員は、児童生徒の音楽的諸能力を伸ばしつつ、各コンピテンシーを育成するために、どのような授業づくりを進めるべきなのだろうか。

そこで筆者は、高等学校1年生音楽選択者を対象に、「課題発見・解決学習」を取り入れた実践研究を行うこととした。特に今回は、設定した課題を解決させる際に必要となる「解決策創造力」に主眼を置き、教師がどのように支援するべきなのか、考察を深めることとした。

I 「広島版『学びの変革』アクション・プラン」における課題発見・解決学習

ここでは、広島県教育委員会ホームページで公開されている各種PDF資料に依拠して、広島県内で取り組みが進められている「課題発見・解決学習」の概要について述べる。

これまでの学びは「何を知っているか」「どれだけ知っているか」を問う「知識ベースの学び」であったが故に、受動的で浅い学習になってしまっていた。そういった状況を改善し、「学習者が基点となり、能動的で深い学び」を行うことを目指し、課題発見・解決学習を取り入れることが提案された。この学習では、課題発見や解決の糸口となる知識について、単に量を求めるだけではなく、構造や質も同様に重視されている。

図1は、広島県教育委員会が作成した課題発見・解決学習のイメージを簡略化したものである。これによると、生徒たちはまず、各教科で習得した基礎的な知識等を活用して①課題の設定を行うことから学習活動を開始する。続いて、企業・自治体への訪問調査、ICTの活用などによって②情報収集・整理分析を進める。その後、持ち寄って情報をもとに③解決策の創造を行い、学校内外で④解決策を発表する。最後に、⑤解決策の実施を経たうえで、⑥更なる課題解決に挑戦していくという仕組みである。

なお、この活動に関して、「総合的な学習の時間を始め、各教科等の学習において推進する」ことが示されており、各教科・科目の中だけでなく、教科の枠を越えて実践されるものと捉えるべきだろう。

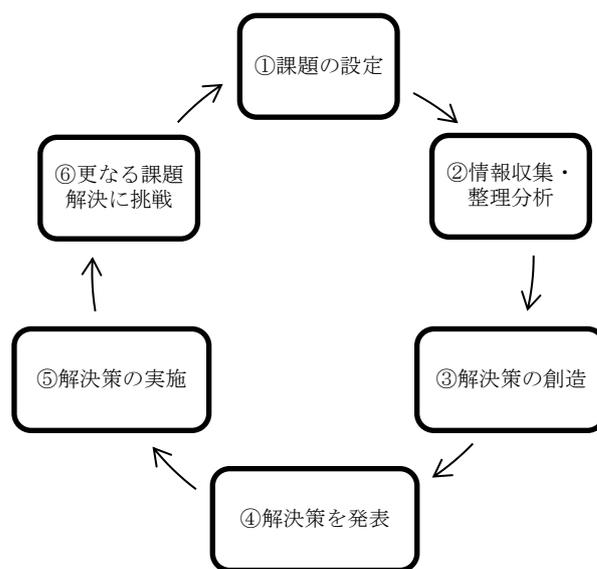


図1 「アクション・プラン」における課題発見・解決学習

II 音楽科における課題発見・解決学習

平成19年6月に改正された学校教育法では、第30条第2項に「基礎的な知識及び技能の習得」や、「思考力・判断力・表現力等の育成」について示された。その後、平成20年に告示された学習指導要領では、小・中学校の音楽科において〔共通事項〕が新設された。この趣旨について、文部科学省発行の解説では「音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成」についての記述がみられる。ただし、併せて「〔共通事項〕はあくまでもそのみを扱うのではなく、表現及び鑑賞の各活動の中で扱うものである」として、各表現活動や鑑賞活動の中で適宜取り上げるよう示された。

それらをふまえると、図1における①課題の設定は、これまでに習得した各演奏技能や、学習した〔共通事項〕に基づいて行うが、楽譜や音源、映像などをはじめとした資料を用いて②情報収集・整理分析を行い、よりよい音楽表現を求めて試行錯誤しながら③解決策の創造を進めるうちに、既習事項を活用し、場合によっては、新たな音楽概念の会得や、これまでにやったことのない表現方法への挑戦もあり得る。

ろう。そして最終的に、口頭や記述による説明をすることで④解決策の発表，さらには実際の音楽表現をすることで⑤解決策の実施を行うが、その後には振り返りを行ったり、周囲からの感想や助言を聞いたりすることで⑥更なる課題解決に挑戦する契機を得ることもできるはずである。

実際、平成27年度「学びの変革」パイロット校で開発された授業の中には、「学習した楽曲の詩の内容と音楽を形づくっている要素の働きとの関わりをもとに、楽曲を宣伝するチラシを作成する」「楽器の様々な奏法による曲想の違いを感じ取ったうえで、それらを生かしたオリジナルの変奏曲を創作する」など、音楽的諸要素の知覚・感受を課題設定の糸口としている様子が見えがえた。また、生徒自身の目指す表現に向けた、既習事項の活用、組み合わせ、関連づけといった試行錯誤によって、必然的に現段階での思考や判断、表現の力が試され場面が試されたり、伸長させたりする場面が生まれるだろう。1)

今回実践する授業の題材に関しては、図1に沿って授業計画を立てることとした。特に今回は、③解決策の創造に主眼を置く。生徒が既に持っている音楽的知識や技能を活用し、思考や判断を繰り返しながら演奏表現の練習をする場面において、教師がどのように支援すれば、生徒が自身の目指す演奏表現に近づけるのか、あるいは、新たな知識や技能の獲得につながるのか、検討するためである。

Ⅲ 授業計画

「アクション・プラン」の概要をふまえて、筆者は、平成28年10月から12月にかけて、高校1年生の芸術科音楽の授業に「課題発見・解決学習」を組み込むこととした。本題材の評価規準を表1に、学習指導計画を表2に示す。なお、表2の左から2列目の「課題発見・解決学習」には、各学習内容が図1に示した学習過程のどの部分に該当するかを表している。

授業展開の詳細を、以下に示す。

(1) 第一次

年度当初に実施したアンケートによると、今年度の音楽I選択者60名のうち、中学校の音楽の授業でギターを学習した生徒は33名、そうでない生徒が27名という状況であった。したがって、未経験者への指導を行いつつ、経験者が既習事項を復習できるように、ハ長調の音階を用いて弦の押さえ方の基本を確認した。また、G、Em、Am、D7の4種類のコードを提示し、コードの押さえ方やストロークの練習に取り組んだ。なお、4種類のコードの練習に際して、第三次までの学習活動（課題発見・解決学習）を見越して、4～5人1組のグループを編成して取り組んだ。

表 1 題材の評価規準

題材名	ギターを用いた演奏表現	
題材の目標	ギターの楽器の構造や奏法の特徴を生かして、楽曲の形式や歌詞の内容を表現する伴奏を計画し、思いや意図をもって演奏表現する	
使用教材	井上陽水作詞・作曲『夢の中へ』	
対象学年	高等学校1年生 音楽選択者60名（クラスA：23名 クラスB：23名、クラスC：14名で実施）	
観点1 音楽への関心・意欲・態度	観点2 音楽表現の創意工夫	観点3 音楽表現の技能
①歌詞の内容や楽曲の形式に沿った演奏表現を行うため、自分の意見を述べたり、グループ内の意見を聞いたりして、ギターでの演奏表現を工夫する学習に積極的に取り組んでいる。	①井上陽水作詞・作曲『夢の中へ』の旋律や形式の変化を知覚し、それらが生み出す楽曲の特徴や雰囲気などを感じながら、伴奏の強弱や速度、テクスチャなどをどのように変化させるとよいかについて表現意図をもっている。	①ギターの基本的な演奏技能を身につけている。 ②計画した伴奏およびその変化を適切に演奏表現できる技能を身につけている。

表 2 学習指導計画（全 10 時間）

次	課題発見・解決活動	学習目標	主な学習内容	評価				
				関	工夫	技	鑑	【評価規準】 評価方法
第一次 (3時間)		ギターの基本奏法を用いて演奏できる。	楽器の構造に着目し、音の鳴る原理を理解しながら、音階を演奏する。	○		◎		【観点3-①】 行動観察
			ストロークやアルペジオなどの基本的な奏法を用いて、コードを演奏する。		○	◎		【観点3-①】 行動観察
第二次 (2時間)	① ②	『夢の中へ』のコード伴奏をすることができる。	歌詞の内容や楽曲の形式に沿った演奏表現を行うため、さまざまな伴奏パターンを考えたり組み合わせたりしながら演奏する。	◎	○			【観点1-①】 行動観察
第三次 (5時間)	③ ④ ⑤ ⑥	楽曲の形式や歌詞の内容を表現する伴奏を計画し、演奏表現することができる。	歌詞の内容や楽曲の形式をふまえて、伴奏およびその演奏方法を工夫しながら演奏計画を立て、演奏する。		◎	○		【観点2-①】 ワークシート 行動観察
			歌詞の内容や楽曲の形式をふまえて計画した伴奏およびその変化を、適切に演奏表現する。			◎		【観点3-②】 ワークシート 発表

(2) 第二次

第二次以降は、図1で示した学習流れに、本題材での学習過程を当てはめることができる。(図2)

今回は、前次に学習した4種類のコードで伴奏できる楽曲として、井上陽水作詞/作曲の『夢の中へ』を教材として用いた。授業者が模範演奏を示したあと、グループごとに伴奏を考え、歌を加えたうえで演奏発表することを最終目標として提示した。この時点で、明確に①課題の設定こそしていないものの、これまでの授業内容の大半が、旋律の歌唱及び器楽演奏であった生徒たちにとっては、「伴奏を演奏すること」、そして「伴奏と旋律を同時に計画すること」に対して課題意識を持ったといえる。

伴奏をつける過程として、第一に、1~2小節単位の伴奏パターンを自由に作成させた。さらに、②情報収集・整理分析の1つとして、旋律の変化から楽曲が「A-A'-B」という形式であることを読み取った。そのうえで、「旋律の変化や歌詞の内容に沿った伴奏およびその演奏方法」を具体的な課題として据え、まずはこれまで作ってきた伴奏パターンから3種類を組み合わせることから、③解決策の創造を開始するよう促した。なお、伴奏の計画を記入するためのA3サイズのワークシートを、各グループに1枚ずつ配付した。

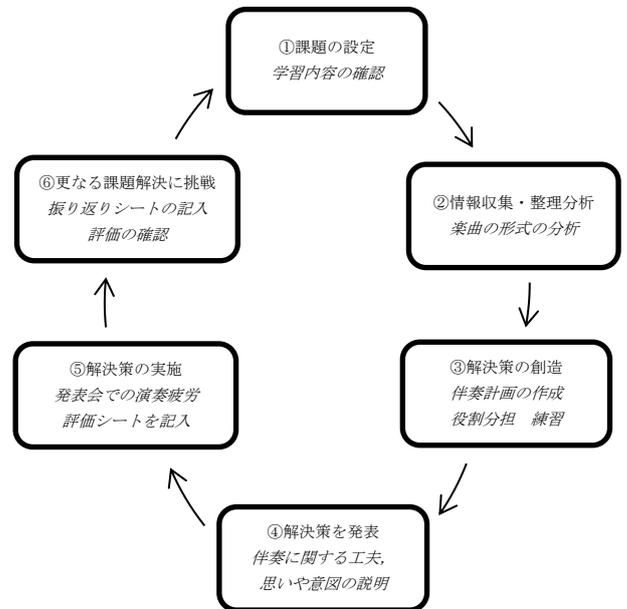


図 2 本題材における課題発見・解決学習

(3) 第三次

発表会に向けて、「全 25 小節のうち、最低でも 8 小節以上はギターで演奏し、8 小節以上は歌唱すること。ただし、ギター演奏と歌唱は、同時に行っても別々に行ってもよい」という最低限のルールを設定し、メンバーの役割分担を考えるよう指示した。また、③解決策の創造の第二段階として、伴奏パターンだけでなく、実際の演奏方法でも「A-A'-B」という形式を表現するためにはどのような工夫が考えられるか、各グループで考えさせることとした。なお、第二次と同様に、役割分担などを記録する A3 サイズのワークシートを配付した。生徒は、第二次で記入したワークシートをもとにギターを弾きながら役割分担および曲想の変化について案を出し、第三次のワークシートを記入した。授業者は、各グループを回って進捗状況を確認し、適宜指導や助言を行った。

最終発表会では、④解決策の発表として、演奏前に各グループが工夫した伴奏内容や演奏方法について口頭で説明させ、のちに演奏を行って⑤解決策の実施をし、他の生徒たちに評価してもらった。その後、⑥更なる課題解決に挑戦する足掛かりとして、振り返りシートへの記入、ビデオで録画した発表会の動画の視聴、グループごとに取りまとめた評価シートの内容の確認を行った。

IV 学習の実際

本題材の授業がすべて終了してから、生徒が記入した各ワークシートや録画した発表会および授業の様子を検討した結果、解決策創造力の育成に関わってさまざまな成果と課題が発見できた。

(1) 成果

最終発表会終了後に配付した振り返りシートにおいて、「今回のグループ別弾き歌い練習を通して学習したことや気づいたことは何か」「それらを今後の学習や音楽経験にどう生かしたいか」と自由記述形式で問うと、概ね表 3 のように意見を分類できた。

表 3 振り返りシートの記述内容

◆今回のグループ別学習を通して学習したことや気づいたことは何か	◆今回学習したことは今後の学習や音楽経験にどう生かすことができるか
<ul style="list-style-type: none">・協力することの大切さ (34 名)・音楽的な工夫の幅広さ、楽しさなど (11 名)・演奏に対する責任感 (6 名)・練習すればできるようになるということ (5 名)・弾き歌いの難しさ (3 名)・リーダーシップの大切さ (2 名)・表現したいことを強調すること (1 名)	<ul style="list-style-type: none">・ギターへのさらなる挑戦 (12 名)・2つの作業を同時にすることへの挑戦 (10 名)・練習内容や方法を工夫する (8 名)・周囲と協力すること (8 名)・他の楽器への挑戦 (7 名)・堂々と演奏する (5 名)・自分から意見を出す (4 名)・曲調の変化に着目して音楽を聴く (4 名)・周囲の音を聴きながら演奏する (2 名)

このうち、解決策創造力の伸長に関わる内容について具体的に考察する。

①個人的課題との相乗効果

半数以上の生徒は、振り返りシートにおいて「協力することの大切さ」について言及していた。例えば、「これまでやったことがないものでも、同じグループの人と助け合ったり練習して意見を出し合ったりすれば自然と上達した」「1人で練習するよりもグループで練習した方が他人を見て自分のできていないところに気付いたりして上達できた」など「技能の向上」についての意見、「1人ひとりの音が重要になるので、誰かに任せたりせずにはっきり自信を持って演奏した」「『自分のパートをやり切る』という責任感が持てた」といった「個としての責任感」についての意見など、解決策を創造する際、他者との協働的な学びが必要だったことについて述べている。

生徒の状況によっては、授業者が生徒全体に提示した課題以前に、技能的な課題、人前で音楽表現をすることに対する苦手意識などがあり、1つの課題が他の個人的な課題と複雑に関係していたと考えられる。しかし、他者と協力して解決策を創造する過程で、結果的に、個々人がもつ課題とも向き合い、解決の糸口を見つけたり、改善を図ったりすることができたと考えられる。

②音楽的思考・視野の拡大

どのグループも同じ楽曲を弾き歌いし、同じ課題およびルールを提示したが、表4に挙げた例をはじめとするさまざまな演奏表現が完成した。振り返りシートでは「それぞれのグループで全然違う工夫を取り入れていて、いろんなパターンがあるんだなと思った」「1人ひとり出す意見が違うので、同じ曲でもグループごとで全然違う雰囲気になっていた」など、自分だけ、あるいは自分たちのグループでは思いつかなかった表現に驚き、解決策の多様性を感じた生徒も多かったようである。

表 4 生徒が作成した演奏計画の例

曲の形式 グループ	A	A'	B
グループ①	<u>探し物が見つからないやせなさを表現するため、弦を優しく弾く。</u>	<u>夢の中へ誘うように、リズムを少し細かくして、弦を強く弾く。</u>	<u>夢の中へ行っている途中のわくわくしているのを表現するため、休符を入れずに盛り上げる。</u>
グループ②	<u>伴奏に間をもたせることで、探し物を探し終えるのを待っているゆったりした雰囲気にする。</u>	<u>早く一緒に踊りたいという雰囲気を出すために少し速く演奏する。</u>	<u>ストロークは少し遅めにして、夢の中へ入っていくような雰囲気を出す。</u>
グループ③	<u>落ち着いた感じのリズムを、弱くゆっくりとストロークで演奏する。</u>	<u>ベースを加えて曲に安定感を出す。Aのセクションより音量を上げる。</u>	<u>アルペジオ奏法に切り替える。音量をAとA'の間ぐらいにする。</u>

※下線は筆者によるもの。_____は表現したい曲調に関する記述、_____は表現するための演奏上の工夫に関する記述。

したがって、自分自身で既習事項を組み合わせたり関連づけたりすることはもちろん必要だが、解決策を創造する場面では、他者の意見を積極的に聞き、自身に取り入れることこそ重要であるということがいえよう。そこから新たに概念を認識し、様々な角度からの思考の在り方に気づく可能性が大いにあるからだ。延いては、そういった学習姿勢を今後の音楽学習、さらには他教科での学習にも普遍的に生かしていけると考えられる。

(2) 課題

授業内で散見された生徒の学習活動の問題点は、以下の2点に集約できた。

①演奏の容易さを重視する傾向

第二次において作成した伴奏パターンを組み合わせる際、楽曲の形式や歌詞の内容を思考の中心に据えることのできたグループも多かったが、中には、演奏の容易さのみ意識が向いているグループも存在した。ギター演奏の経験の浅さや、それによる自信のなさが影響して、楽曲のもつ特徴や授業者による課題の提示から意識が遠のいてしまった可能性が高い。題材における目標を折に触れて提示し直す必要があると考える。また、演奏技術に対する不安を軽減するためにも、ギター経験者の有無を事前に把握し、グループ編成に生かすべきだろう。



②演奏の工夫・根拠・効果を関連づける継続的思考

図 3 第三次の授業における生徒の様子

授業者が示した「8小節以上演奏, 8小節以上歌唱」というルールを話し合いの基点にしているグループは非常に多く、それ故に「演奏担当者と歌唱担当者を8小節単位で入れ替える」という発想は多くみられた。しかし、担当者を入れ替えるだけに留まっており、「それによってどのような音楽的变化が生じるか」という部分にまで考えを深めているグループが少ないという問題点が、第三次2時間目あたりから浮上した。

また、セクションごとに伴奏のリズムを変えたり、音量の変化をつけたりといった工夫はできているが、「とりあえず変化がつけばいい」「最後に向けて徐々に盛り上がっていく曲の方が一般的だろう」など、変化の程度やタイミングの細かさにまで思考が深まらなかったグループも存在した。

このような問題点の根本は、演奏の工夫と根拠、効果を結びつけるための継続的思考ができていないことにあると考える。今回の授業は週に1回のペースで実施しており、前回の授業で何を検討し、どこまで練習を進めたかを振り返るのに時間を要したグループもあった。また、第三次以降の各授業では、進捗状況の報告として完成した部分までを実際に演奏または口頭で披露する時間を授業の最後に設け、自分たちの演奏や計画について他者から意見をもらうようにしていたが、大半のグループは口頭での説明のみで済ませていた。その背景には、人前での演奏に対する抵抗もあるが、それ以上に、他者に聞いてもらえるまで練習し、完成させられていないという状況があったといえる。

この状況を解決する方法として、まずは、演奏計画を記入するワークシートの簡易化が挙げられる。グループごとに記入するワークシートは第二次以降で計4種類用意していたが、記入内容を少なくし、かつ、前回までの取り組み状況が分かりやすくなるよう工夫して、実際に音を出しながら試行錯誤をすることに生徒が集中できるようにするべきであろう。

また、授業者による説明をできるだけ簡潔に済ませ、その分生徒自身の話し合いに授業者が関わり、どの生徒にもしっかりと意見を主張させられるよう配慮をすることが、改善策として考えられる。

1年 組 _____ グループ _____ / _____ () _____ 曲の形式をふまえた伴奏の変化をまとめよう! _____ 本日の明会: _____ 本日の書記: _____

◎伴奏自体の変化をどのように起こすのか、伴奏の弾き方にどのような工夫をするのか、音質で整理しよう。ここで整理したことを最終発表前に周知し、A-A'-Bの変化を軸き取ってもらおう!
 注意: 「人数を増やした/減らした」というだけは×! 人数の増減によって、どんな効果があるのかを明確にしよう。

授業中の様子 生徒の発言 一人一人の発言 一人一人の発言	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">【 A 】</div> ➡ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">【 A' 】</div> ➡ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">【 B 】</div>
	➡ ➡

図 4 配付したワークシートの一部

おわりに

本論文では、広島県教育委員会が策定した「広島版『学びの変革』アクション・プラン」の中に示された「課題発見・解決学習」に着目し、広島県の目指す「深い学び」に対して、音楽の授業づくりの実践研究を行い、分析と考察を行った。

とりわけ、解決策創造力に着目した結果、①個人的課題への相乗効果、②音楽的思考・視野の拡大といった成果が得られた。その一方で、①思考の充実よりも演奏自体の容易さを重視してしまう傾向、②演奏の工夫・根拠・効果を関連づける継続的思考のさせ方などに課題があることもわかった。

不用意に課題発見・解決学習を取り入れることは、かえって学習のペースを乱すことになりかねない。まずは授業者が、課題の設定から実施までの見通しを立て、生徒の思考の注意深く観察できる状況を実践につくることで、生徒の学びはさらに充実するだろう。

注

- 1) 広島県教育委員会ホームページに掲載されている、平成27年度「学びの変革」パイロット校事業 小・中学校課題発見・解決学習プロジェクト パイロット教員開発単元一覧 (<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/juten-h28syoutyuukadaihakken-pairotto.html>) から、音楽の授業を開発した学校を確認し、例示している。

引用・参考文献

- ・ 広島県教育委員会ホームページ ホットライン教育ひろしま 広島版「学びの変革」アクション・プラン
<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/global-manabinohenkaku-actionplan/>
- ・ 文部科学省 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社、2008。